



曾野綾子

中央公論社

切りとられた時間

切りとられた時間

定価四八〇円

昭和四十六年八月三十日印刷
昭和四十六年九月五日発行

著者 曾野綾子

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四

©一九七一 検印廃止

目次

第一章 釣師

5

第二章 女

75

第三章 神父

107

装
幀
析折久美子

切りとられた時間

第一章 釣師

1

釣師の傭った小さな伝馬船が島に近づいた時、既に空模様はくずれかけていた。

海はまだ凪いでいたが、雲は奥深くから動き始めている。ただしその罅割れた切り口は、まださほど鋭利ではなく、裂け目はゆっくりとそり返り、盛り上りながら飛翔した。

船が島で唯一の防波堤と小さな棧橋を持った港に近づくと、普段なら、透明な油の面のようになっている海面が、不安に脅えながら、一面の縮緬皺を泛べて震えた。それはその瞬間、初めて吹いて来た台風の匂いのする強風の為であった。

港の右手には、満潮時には孤立する疣のような半島が突き出している。その部分は、標

高三十米ばかりあり、岩の間を、野性のビロウが密生していた。島全体のビロウの葉は、今、海面と同じようにそうけだちながら震えていた。そして釣師が、細い、視力のいい眼を上げてその峯を見上げた時、一匹の山羊が毅然と顔を上げ、風に吹きさらされながら、頂上近くの岩場に立っている姿が見えた。

船は棧橋の先に近寄った。エンジンの音がやっと低くなる。船頭は器用に速度を調節しながら、船尾に積んであったロープをビットに引っかけ、エンジンを停めてから身軽に棧橋にとび移った。

釣師は道具と小さなボストンを取り上げた。彼は船頭が何か言うことを期待していた。それは何でも構わなかった。《嵐の来る前に着けてよかった》でもいいし、船賃の請求でもよかった。釣師は、いずれも離島には違いないが十軒の沖合にあるもう少し大きな本島もとしまから、この潮に洗われて木部の痩せ細りかけたような伝馬船に乗って来たのだが、それは役場の船だということがわかっていただけで、公営の便船としてどれだけの船賃を払うことになっているのかわからなかった。釣師の目には、急速に荒々しく暮れて来た細長い棧橋の空間の上で、ややけだるそうに動いている船頭の足が映っていた。それは灰色のゴムサンダルをはいた猿のような色の黒い素足で、古びて生地が薄くなってしまったズボンの

裾が、その脚を包んでひらひらしていた。釣師ははらりと手をかけて、棧橋の上にとび上り、一瞬顔をしかめた。向う脛を打ったのではない。或る想念が彼を捕えたのだが、それは言葉に表して、他人に説明しにくいものだった。彼はその瞬間、島を掴んだと感じ、それで顔をしかめたのだった。棧橋には、よくもこれほど飲んだものだと思われるほど多量のプラスチックの営業用ケースに詰められたさまざまな商標の清涼飲料の空壺が積んであったが、その極彩色のケースの赤や黄色の空間にだけ、陰惨に暮れて行く病的な夕暮の色が際立って濃厚に溜って行くように見えた。

「宿はどこですね」

釣師が尋ねると、船頭はその言葉を全く理解しないように、「ヒャクエン」と言った。それでやっと釣師は、「ヒャクエン」というしゃっくりに似た音声が、船賃を指すのだと思ひ、ズボンのポケットから硬貨を探り出した。彼はそのような動作の合間に、どこかで自分を見つめている視線があると思った。それはその瞬間、釣師が突然、野性の感覚をとり戻し、その機能によって伝達された警告のようなものであった。彼は船頭に金を渡しなから、素早くあたりを見廻した。すると子供くらいしか体積のない一人の男が、塵取りほどのやっと尻が入るだけの木製の「いざりくるま 甕車」に乗っているのが見えた。男には両脚がないの

で、彼の upper body は、坐りのいいキノコのように、信じられないほど小さな車に乗っていられたのだった。

風が吹き出していた。風には胸を震わせるような騒乱のきざしが含まれていた。蹩車の男は、風に吹かれに棧橋へ来ていたのだろうか、これ以上ひどくなると、彼自身が帆の役目を果して、彼はその蹩車ごと走り出して、海の中に転落しそうだった。

釣師はそこで、もう一人の小柄な男が、村の方角からせわしなくやって来るのを見た。

「海はどんな具合だあ」

彼は船頭に尋ねた。

「これから、もう一度戻るのには、無理かい？」

船頭は何か答えたが言葉は聞きとれなかった。しかし語調から船頭が、そんなことは論外だと言っているらしいことがわかった。それらの会話は、釣師の後頭うしろあたまの方から、芝居の幕開きの科白のような、落着かなさで聞えて来た。彼はそれから逃れるように棧橋の強い風に逆らって歩き、やがて村の懐深く突き刺っているように見える村の道に入った。それが村のメイン・ストリートであることは間違いなかった。村の家々は、石垣か生垣かに囲まれている。石垣は黙し、はまいぬ枇杷や三葉はまごうの生垣は興奮して揺れていた。植

物は石垣の上にもない訳ではなかった。くろみのすずめ瓜や花きりんのような、石に心を寄せている花は、風の中でもそれらしくじっとしていた。

釣師は、数十米歩いてから、おおばぎの木に、うちつけられた「民宿」という小さな看板を見ると、珊瑚礁の破片^{かけら}でほのぼのと白く見える前庭に入って行った。彼は小さな玄関の土間に、道具を下ろした。一番手前の部屋が見える。畳は敷いてなく、板の間のアンペラ様のものの上に、嵐の匂いを含んだ風が吹き渡っている。その風は何かを匂わせた。釣師は刻々に自分が昔の感覚を取り戻しつつあることを、動悸の中に感じた。

案内を乞わなかったのは、誰もいないような気がしたからである。眼に見える範囲には、安ものの飾り棚や積み上げられた古雑誌の類がおいてあり、鴨居の上には六枚の写真が飾ってある。老人、老女、初老の男、十五、六歳に見える少年、五つと三つくらいの女の子二人。それらが総て森閑として、只、蚊やりの匂いだけが、ふっと襲って来た。その瞬間、死角になっていた部屋の隅から、獣の起き上るに似た気配がした。それはワンピースを着た、骨太の、素足の女だった。

「部屋ありますか？」

釣 師
「ありますよ」

女は色が黒い。暗闇では目鼻立ちもさだかではなかった。案内してくれたのは、たった二部屋の客室のうちの奥の方の六畳である。壁はペンキも塗ってないベニヤで、隣室との間は、襖一重だった。それでも小さな床の間があり、遠く離れているというだけで貴重品に見えるアイヌの木彫の熊が落ちつかなくおいてあった。

「生憎あいにくのお天気で」

まだ電燈をつける気配はないが、向い合ってみると、女はもう若くはないにしても意外と整った顔立ちだった。五十近くであろうか。

「釣りですか？」

「まあ、そのつもりでしたがね。こう荒れて来ちゃあね」

「今、着いたんですか」

「十分前に本島から」

「棧橋に誰かいました？」

「ええ、二人ほど、脚のない人と……」

「船は出なかったでしょう？」

「え？ 戻ることになってたんですか？ 僕がし市で調べた予定だと、あの船は今日はこ

と泊りで、明日の朝出航とでていましたかね」

「本当はそうなんだけど、盲腸の患者が出てるもんだからね、役場としては、せめて本島まで送りたいんでしょう。何しろここは無医村だから」

「本島へ行けば、手術できるのかな？」

「手術は無理だけどね、保健婦と産婆はいるですよ」

「病人は年寄りですか？」

「いや」

女は急に実感のない言い方をした。

「中学生ですよ。中学一年生」

釣師は一瞬考えていた。彼は宿の女主人の言葉に拘泥^{こだわ}っていたのだった。中学生には、病気になどなる資格がないとでも言うような……。

「船が出ない場合はどうなるんだろう」

「ヘリコプターが来るんでしょう。このすぐ後に小さな岡があるんだけど、その岡の後側に、米軍のリーダー基地があるんですよ。そこへ着くことになってるけどね」

「嵐では来られないだろうね。いくら米軍でも」

「米軍はめったに手を貸しません。市から警察のヘリコプターが来るのよ。少々危険を犯してでもね。そうすると、翌日の新聞に必ずその記事が載るからね」

釣人は黙って聞いていたが、彼は女の言葉に微かな悪意を読みとっていた。

「ちょっと僕は歩いて来ます」

「これからですか？ 陽は間もなく暮れるけどね。ことに今日は荒れているし……」

「薄闇でも不思議と物に見えるものだよ」

女主人はその言葉に引っかかったようだった。それは誰にとっても気になる言葉ではあったが、どうして気になるかはやはり誰にも明瞭にわかる訳はなかった。

釣師が玄関に出た時、土地の男が一人、入れ代りに入って来た。船は出ないって？ と女主人が言っているのが聞えた。それに対する村の男の答えは、妻まじい方言であった。

釣師はそれを一言も理解することは出来なかった。しかし言葉の意味は汲みとれなくとも、彼には、その巨大な南方の鳥が囀っているような会話が全部憶測できるような気がした。

《全くなあ、船が出ないんで困ってるよ。病人は痛がつてるしなあ、何とかして、明日までにヘリが来れるようになればいいが》

釣 師

釣師は、海の方へ歩いて行った。先刻の壁の男は、海に吹き落されてしまったか、家に帰ったか、もう姿は見えなかった。彼は真直ぐ泡立っている海岸へ出ると、そこに幾棟かの無人になった製糖工場らしい建物の廃墟を発見した。屋根はあらかた飛んでしまつて崩れかけた側壁の煉瓦の間から、野草が凶暴に生い繁つて揺れていた。海岸にはあたりの荒涼とした風景に似合わない新しい舗装道路が岡の方へ伸びていたが、それは明らかに米軍の基地の方へ行く道であらうと思われた。彼はその道を辿り始めた。彼はややうつむき加減に、風にさからいながら足許の土を見て歩いていたが、坂の途中で立ち停ると、ふり返つて海を眺めた。南海の原色に彩られて伝説と共に誕生した多島海の島々は、今、人間には聞きとれぬ言葉で騒ぎ始めていた。空は海に向つてなだれ落ち、海はそれを迎えて沸き立った。それは人間を全く無視した背後の力の君臨を暗示していた。何千年という長い人間の歴史が、この島の上であの野性のビロウのように蔓延^{はびこ}ろうとも、それはこの島を包む壮大なカオスの中にあつては、とり立てて記憶すべきものでもなかった。釣師は、自分は今、神話の時代と向ひ合っているのだ、と感じた。彼はそのまま岡の頂上まで登り続けた。

たった一度だけ、彼は脅えたように立ち寄り、仁王立ちになって、島の地肌を見つめた。彼は叫びの中にあつた。椰子も羊歯も枇杷もがじゅまるも蘇鉄も野性の無花果も、凡そあらゆる植物が声をあげて揺れ動いていた。それは女が秘事を隠そうとする時に、わざとはしゃぐように、釣師には胡散臭く思われた。島の草木は、あげて何かを秘めているようであつた。

岡の上まで来ると、そこには一つの人工的な景色が急に展開していた。そこには駱駝の背瘤に似た二つの丘がなだらかに続いていて、実際に駱駝の背のようになつていて、刈り込まれていた。野性の植物は後退し、神話の世界は卑屈にたじろいで遠まきになっているように、釣師は一瞬、悪寒が背筋を走るのを感じた。

そこは、米軍のリーダー基地であつた。基地に備わるべき、あらゆるものが、玩具のように置かれていた。巨大なアンテナ、幾棟かの兵舎、長々と続くワイヤー・フェンス、入口の検問所を閉している長い棒^バ。

紺色の制服を着た日本人の警備員が、検問所の小さな見張小屋^{ミヤカ}の中にいたが、釣師を見つけると、外に出て来た。少くとも釣師はそう思い、訊問を受けることを覚悟しながら立っていた。しかし警備員の眼は、釣師とは全く逆の基地の内部に向けられていた。彼は低